

中屋先生とパドバー先生のこと

第10期 尾原 嘉道・蓉子（1962年卒業）

私たちは、1966年に、ニューヨークのハドソン川を見下ろすリバーサイド・チャーチで結婚式を挙げた。アメリカ科1962年卒の十期生同士。尾原蓉子（旧姓石川）の父母役としては、パドバー先生夫妻、私、尾原嘉道側の父母役としては、旧富士製鉄（現新日鉄住金）アメリカ代表の太田忠行氏夫妻。その他、各々の関係者が出席した。



(Riverside Church) (パドバー先生夫妻/筆者/太田夫妻)

私は富士製鉄の研修生、ニューヨークのアップタウンにあるフォーダム大学ホーガン先生（アメリカ鉄鋼経済論の第一人者）の助手であり、同時に富士製鉄ニューヨーク事務所員であった。蓉子はフルブライト留学生として、ニューヨーク マンハッタンのFIT (State University of New York, Fashion Institute of Technology) に来ていた。

結婚するまでの、また、結婚後しばらくの間の二人の住居は、ブルックリン・ハイツの Amity Street 129 番地。19世紀末に建てられた英国調ブラウンストーンの重厚なパドバー先生宅の三階、いわゆる屋根裏部屋であった。しかし物理的にも精神的にもいじましい思い出は全くない。三階の窓からは、近くの海軍病院の看護婦寮が見え、時折楽しい風景にも遭遇した。同期の樋口祐一、福林昌身両氏も折に触れ来てくれた。

先生は我々アメリカ科10期生のフルブライト交換教授であり、トーマス・ジェファースンの研究では米国のトップに位置する先生であった。ここに私が、次いで蓉子が転がり込むことを画策してくれたのが、ほかでもないアメリカ科主任教授の中屋健一先生であった。「人の世話にはなるな。でもなるならなるで、同じことを次の世代に返してやれ」こう言って私の背中を押し続けてくれた。二人が住み込み、そして結婚式の父母役を引き受けるまでの一連について、中屋先生からパドバー先生に依頼の国際電話があったことを、ずっと後になって、私たちはパドバー先生から聞いた。なんとなく良くして下さるなあとは思いつつも、当時は無我夢中で知らぬが仏の二人であった。

パドバー先生からは蓉子もフルブライト留学先について、貴重なアドバイスをもらった。数あるニューヨークの大学の中で、FIT が蓉子の志望スペックに最も合う大学だとのアドバイスであった。

この原稿を書いている今、2016年10月、蓉子が織研新聞社から『Fashion Business 創造する未来』と題する本を出版した。蓉子個人としては初めての450ページ近い大作(?)である。出版社の新聞広告やアマゾンの書評によれば、「日本のファッションの未来を創造する 尾原蓉子渾身の力作」だそう。その「まえがき」の終わりはこう結ばれている。「FIT 留学から奇しくも50年の節目の年に本書を上梓することに感慨無量である」。そして「あとがき」には、本書の出版に直接お世話になった多くの方々への謝意が述べられているが、それ以外の書ききれない程多くの方々の筆頭に、今は亡きこの恩師二人、中屋先生とパドバー先生の存在がある。今思えば、両先生は個々の学生の思いを大事にしながら、将来へ向けての成長をガイドして下さる偉大な存在であった。



(2016年10月出版)

なぜアメリカ科を選んだかについて必ず触れるようにとの編集ガイドラインであるが、正直言って、私にはそれほどはっきりとした哲学があったわけではなかった。ただ「元気で卒にとらわれない何かがありそう」とは思っていた。むしろ何でもよいから、ホルマリン臭漂う理科二類から脱出できれば良い、というのが本心だったか。

蓉子がアメリカ科を選んだ理由は、高校時代に AFS 交換留学生として米国中西部のミネソタで一年を過ごし、アメリカの自由でのびやかな、特に女性が、男性に伍してというより、女性であることを生かしながら澁漉と仕事をしている社会に感銘を受けたからだという。それまで将来は医者か弁護士と考えていたのが、やがてファッション分野でキャリアを積むことになった。

アメリカ科の真価は入ってみて分かった。卒業した後、もっともっとよく分かった。よき師、よき友、よき先輩・後輩。私たち二人がニューヨークでの新生活を始めるまでの、前述した両先生とのエピソードを知って頂くだけでも、アメリカ科が持つ真の素晴らしさがお分かり頂けるであろう。



(パドバー先生)



(先生と10期生たち)

「人にお世話になったら同じことを次の世代に返してやれ」の中屋先生のお言葉。自分たちもそろそろ老境の身になるにつれ、焦りに近い思いとなって、二人の胸にずしりと重い。